《原著論文》

乳幼児を持つ母親の育児体験認知と自己イメージ，支援認知との関連

田村知栄子*　眞﨑由香*　宗像恒次**　橋本佐由理*

The Association between the Cognition of Child Rearing Experience, Self-image and Perceived Support from Family

*Chieko Tamura *Yuka Masaki **Tsunetsugu　Munakata *Sayuri Hashimoto
*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba
**Institute of Health Behavioral Science

Abstract：The purpose of this study is to examine the psychosocial factors of the cognition of child rearing experience. The subject was 692mothers. This study has yield several results with covariance structure analysis, of which the following is the most important. The perceived support from family may influence on their heightened the self-reward oriented self-image, and which reduced the cognition of child rearing experience. These results could suggest that the psychological intervention for improving the self-image would be effective for decreasing maternal distress.

キーワード：

育児体験認知	the cognition of child rearing experience
自己報酬型自己イメージ	self-reward oriented self-image
支援認知	perceived support
共分散構造分析	covariance analysis

＊筑波大学大学院人間総合科学研究科
＊＊健康行動科学研究所

Ⅰ．緒言

我が国において育児に不安を抱える母親が多く報告されている。育児不安は子どもへの心身への負の影響がある[1) 2)]ことや児童虐待に繋がる[3)]との報告があるように育児不安を軽減することは緊要な課題であると言えよう。

育児不安に関する研究は，これまで数多く報告されている[1)～7)]。それらの研究は，育児不安の軽減のために家族からの協力，周囲からのサポート，保育所などの育児環境の充実の重要性を指摘している。本邦政府は2000年に入ると健やか親子21，次世代育成支援対策推進法を制定した。育児不安の原因の一つである，在宅の母親の孤立を防ごうと，子育てサロンやつどいの広場，子育て支援センターの拡充がなされ，社会環境的なサポートの提供が充実してきた[5)]。しかしながら，従来の対策では育児不安が軽減されていていないという現状[6)]を鑑みると単にサポート資源の充実だけでは，育児不安を軽減・解消することは難しいのではないだろうか。そこで，育児不安軽減支援には新たな着眼点が必要かと思われる。

実際の家庭におけるサポートを母親がどのように捉えているかを検討した点に関して，牧野の調査[7)]によれば、夫が子どもと遊んでいるかという「時間の量」と育児不安との関連は見出されなかった。が，「夫が育児に協力している」と捉えるという「母親の認知」が育児不安の軽減と有意に関連することが報告されている。このことは，母親が実際にどれだけサポートされているかということよりも，主観的に夫を始めとする周囲からのサポートをいかに認知するかの方が重要であると示唆される。

さらに，このようなサポート認知と母親の個人特性との関連性が指摘されている。例えば，金岡・藤田[8)]は，母親の特性的自己効力感とサポート認知，育児への否定的感情との関連を示した。すなわち，特性的自己効力感が高い母親は，サポート認知や育児への否定的感情は低かった。また，自尊感情が高いと，他者への親和性が高くなるためソーシャルサポートを有効に用いるという報告がある[9)]。反対に，母親が育児にストレスを高いと認知しているとサポートの緩衝効果にも限界があり[10)]，母親のコンピテンスが低いと，実際に社会的，家族からのサポートあったとしてもネガティブな方向へ働き，子どもへの愛着も低くなる[11)]などの報告もある。

つまり，母親自身が自分に抱いている特性的自己効力感などが示す自己イメージの良好さは周りへのサポートの要求水準が低下するために，サポート認知を改善し，育児をめぐるライフイベントに対する不安を生じづらくするのではないかと考えられる。

そこで母親の自己イメージと育児態度・感情，育児不安との関連に焦点をあてた研究を概観すると，田中[12] は育児への適応能力の高さと自尊感情との関連を示した。また，自己効力感が高いと育児不安が軽減されるなどの報告もある[13]。他方，Mitchelson and Burns[14] は，完全主義と母親の育児不安の高まりとの関連を指摘した。特に，育児に関しての評価を他者や社会規範に求める完全主義の母親は育児不安が高いと報告した。このことは，他者評価の良さを報酬として求めやすい他者報酬型の自己イメージがあり，社会的に完全な母親として認められていないと育児不安が高まりやすくなると考えられる。

このように，母親の育児不安が問題視されているが，母親は育児を通して喜びや幸福感なども経験する[15]。そして，その幸福感は子どものしぐさなどをどのように認知するかと関連していることが報告されている[16]。つまり，母親は育児を通して不安を感じるだけではなく様々な感情や体験をすると言える。

以上のことから，支援をどのように捉えるかという支援認知は，母親の自己イメージが影響し，また自己イメージが良好だと育児体験への認知にも影響するのではないかと考え，本研究に着手した。支援認知，自己イメージとメンタルヘルスの良好さとの関連は先行研究からも指摘されている[17] [18]。そこで，支援認知が高い母親は，自己評価の良さを報酬として，自分に自信があり，自分の気持ちを表現できる，問題を解決できるなど自己報酬型の自己イメージがあるため，育児体験認知も良好になるのではないかと考えた。本研究では，母親の自己イメージと支援認知，育児体験認知に焦点を当て，新しい育児不安軽減支援策の示唆を得たいと考えて調査研究を実施した。

Ⅱ．研究方法

1）調査対象と調査方法

A県B医院において2004年から2008年に出産された乳幼児をもつ母親702名を対象として行われた。調査は2009年９月から2009年10月に，自記式質問紙調査法によって実施された。調査票の配布は，託送法にて乳幼児数分の調査票をB医院の調査協力者によって封入され対象者に配布している。調査票の回収は，郵送法を用いた。調査は，医院からの承諾を得て実施された。調査の趣旨については紙面上で説明し，任意の協力を元に実施すると共に，回答拒否をしても構わない旨，またデータのプライバシーの保護には十分注意を払うことを伝えた。配布総数は1316部であった。回収数は702

票（回収率53.7％）であった。回収された調査票から性別と年齢が未記入のものと男性回答者のものを除き，692票（有効回答率51.6％）を分析対象とした。対象者の平均年齢は34.3±4.39歳，配偶者の平均年齢は36.3±5.55歳であった（表１）。分析には統計処理ソフトSPSS16.0・AMOS5.0を使用しPearsonの相関分析，重回帰分析および共分散構造分析を行った。

表1　対象者の基本属性

	平均値	SD
対象者年齢	34.3	4.39
配偶者年齢	36.3	5.55
子どもの人数	1.91	0.81
同居家族人数	4.28	1.21

2）質問紙調査の内容構成

自己イメージ，支援認知及び育児に関する不安等を測定するため，心理特性尺度を次のように構成した。なお，これらの尺度の得点範囲および本研究におけるCronbachの α 係数については，表２に示す。

a. 自己報酬型自己イメージに関する認知を測定する尺度

自己報酬型とは，自分の気持ちを表現できる自己評価を報酬として良好な自己イメージをもてることである。本研究では，自己報酬型を自己価値感と自己表現型の逆転としての自己抑制型行動特性の尺度を用いて表現している。

①自己価値感

Rosenberg[19] が開発したものを宗像[20] が日本語版として開発し，自分に対してどのくらい良いイメージを持っているかを測定する。「だいたいにおいて自分に満足している」，など10項目で構成される。各項目は，３件法で回答を求めた。得点が高いほど，自分に対して満足し，肯定的にとらえていると解釈し，その自己イメージは自分に満足し自信を持っているといえる。

②自己抑制型行動特性

宗像[21] が開発し，他者から嫌われないように自分の気持ちや考えを抑える傾向を測定する。「自分の感情を抑えてしまう方だ」，など10項目で構成される。各項目は，３件法で回答を求めた。得点が高いほど自己抑制する傾向が強いと解釈する。

b.支援認知を測定する尺度

①家族からの情緒的支援ネットワーク

宗像[21] が開発し，家族からの情緒的支援をどのくらい認知しているかを測定する。「会うと落ち着き安心できる」，など10項目で構成される。得点が高いほど，支援を認知できていると解釈する。

③家族からの手段的支援ネットワーク

宗像[21] が開発し，家族からの手段的支援をどのくらい認知しているかを測定する。「経済的に困っている時，頼りになる」，など５項目で構成される。得点が高いほど，支援を認知できていると解釈する。

c.育児体験認知を測る尺度

①育児不安感

奥富他[22] が開発したもので，子育てに対する不安感を測定する。「子育てに困惑を感じている」，などの13項目による，子どもに対する苛立ち感，子育てに対する見通しのなさ，子どもに対する気がかりの３つの下位尺度から構成される。得点が高いほど不安が強いと解釈する。

②育児自信感

奥富他[22] が開発したもので，子育てに対する自信感を測定する。「何があっても子どもに対して，大きな声を出さないでいられる」，など10項目で構成される。得点が高いほど自信が高いと解釈される。

④日頃の子どもの様子

川井他[23] が開発したもので、日頃の子どもの様子をどのように捉えているかを測定する。「明るい」、「生き生きしている」など12項目で構成される。得点が高いほど日頃の子どもの様子を肯定的に認知していると解釈される。

表2　各尺度の得点範囲および信頼係数

	使用尺度	得点範囲	Chronbach's α
自己イメージ	自己価値感	0-10	.773
	自己抑制型行動特性	0-20	.746
支援認知	家族からの情緒的支援認知	0-10	.897
	家族からの手段的支援認知	0-5	.801
育児体験認知	育児不安感	13-52	.856
	育児自信感	10-40	.828
	日頃のこどもの様子	12-48	.748

Ⅲ．結果

【分析１】自己イメージ，支援認知，育児体験認知の各尺度の検討

因果モデルを構築するにあたり，育児体験認知指標各尺度が潜在変数となりうるかをPearsonの相関分析によって検討した（表３）。

育児不安感については，育児自信感（r=-.512）と日頃の子どもの様子とは有意な負の相関（r=-.489）を示した。また，育児自信感と日頃の子どもの様子とは，有意な正の相関（r=.397）が認められた。それぞれの相関係数は.300以上であった。

また，育児体験認知と自己イメージと情緒的支援認知との関連性をみるためにPearsonの相関分析によって検討した（表３）。

育児不安感については，自己価値感と有意な負の相関（r=-.512），自己抑制型行動特性と有意な正の相関（r=.243）が認められた。家族からの情緒的支援認知（r=-.324）や手段的支援と有意な負の相関（r=-.230）が認められた。

さらに，育児自信感については，自己価値感と正の相関（r=.374），自己抑制型行動特性とは相関（r=-.027）が有意に認めらなかった。情緒的支援（r=.241）や手段的支援（r=.181）と有意な正の相関が認められた。

そして，日頃の子どもの様子については，自己価値感とは有意な正の相関（r=.296），自己抑制型行動特性と有意な負の相関（r=-.128）が認められた。情緒的支援（r=.192）や手段的支援（r=.155）と有意な正の相関が認められた。

表３　各尺度の相関係数

	自己イメージ		支援認知		育児体験認知	
	自己価値感	自己抑制型行動特性	情緒的支援認知	手段的支援認知	育児不安感	育児自信感
育児不安感	-.512**	.243**	-.324**	-.230**		
育児自信感	.374**	-.027	.241**	.181**	-.512**	
日頃の子どもの様子	.296**	-.128**	.192**	.155**	-.489**	.397**

** p<.001

【分析2】重回帰分析による因果関係の検討

育児体験認知と自己イメージ，支援認知との関連性の検討するために，育児関連尺度を従属変数，各指標を独立変数とし，重回帰分析（強制投入法）を行った（表４）。

育児不安感では，自己イメージを測定する自己価値感，自己抑制型行動特性の標準回帰係数が有意であった。また，支援認知における家族からの情緒的支援認知に対する標準回帰係数も有意であったが，手段的支援認知に関しては有意でなかった。

育児自信感においては，自己イメージを測定する自己価値感，自己抑制型行動特性の標準回帰係数が有意であった。また，支援認知における家族からの情緒的支援認知に対する標準回帰係数も有意であったが，手段的支援認知に関しては有意でなかった。

日頃の子どもの様子では，自己イメージを測定する自己価値感，自己抑制型行動特性の標準回帰係数が有意であった。しかしながら，支援認知における家族からの情緒的支援認知，手段的支援認知に関しては標準回帰係数が有意でなかった。

結果から，情緒的支援認知が低く，自己イメージが良好ではないと育児不安が高まる傾向が見出された。手段的支援認知に関しては，直接的影響は見出されなかった。育児自信感については，自己イメージの良好さとの影響が見出されたが，支援認知の高さとの直接的影響が及ぼさないことが示された。日頃の子どもの様子についても，自己価値観の高さとの影響が見出されたが，自己抑制型行動特性，支援認知の高さとの直接的影響が及ぼさないことが示された。

表4　育児体験認知尺度との重回帰分析結果

	育児不安感	育児自信感	日頃の子どもの様子
	β	β	β
自己価値感	.039**	.349**	.252**
自己抑制型行動特性	.115**	.088**	-.039
情緒的支援認知	.1361**	.091**	.051
手段的支援認知	-.042	.043	.060
R^2	.274**	.156**	.098**

** p<.001

【分析3】共分散構造分析によるモデルの検討

分析１及び２の結果を踏まえて，以下のような仮説を立てた。育児不安感認知と自己イメージおよび支援認知について共分散構造分析を用い因果関係モデルを立てた（図１）。立脚した仮説は，「良好な支援認知は，自己報酬型自己イメージおよび育児体験認知の良好さに正の影響を与える。そして，自己報酬型自己イメージは，育児体験認知を良好に促進させる。」とした。

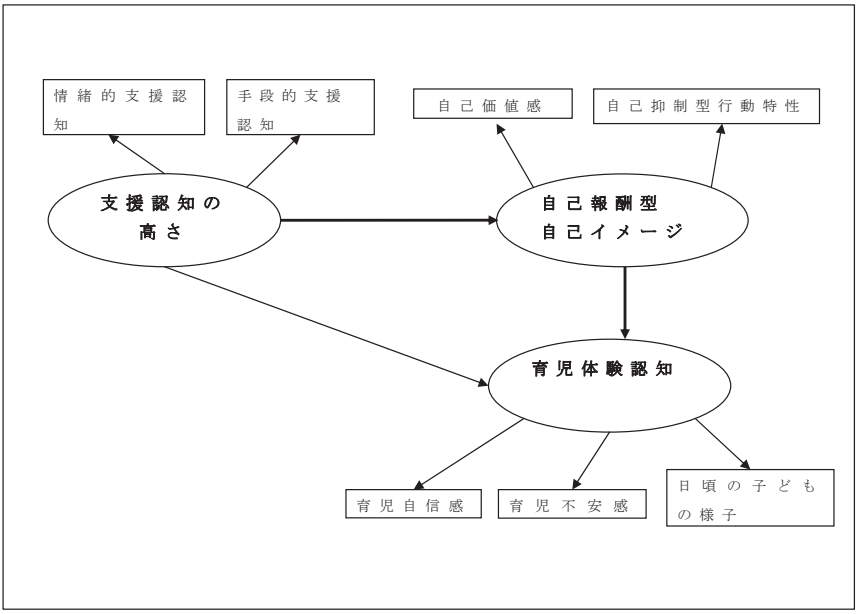

図1　仮説モデル

本モデルにおける潜在変数は「育児体験認知」,「自己報酬型自己イメージ」,「支援認知の高さ」とし、各潜在変数における観測変数は図２のとおりとした。なお本モデルの適合度は，GFI=.988, AGFI=.970, CFI=.983, RMSEA=.049とおおむね良好であった。

潜在変数「支援認知」から潜在変数「自己報酬型自己イメージ」へのパス係数は.47であり，支援を感じているほど自己イメージがよいという結果が示された。決定係数R^2は.22であった。

次に，潜在変数「自己報酬型自己イメージ」からのパス係数は.67であり，潜在変数「育児体験認知」が促進されていた。しかしながら，決定係数R^2は.52であった。

また，潜在変数「支援認知の高さ」から潜在変数「育児体験認知」への直接的な影響は示さず，仮説を棄却した。

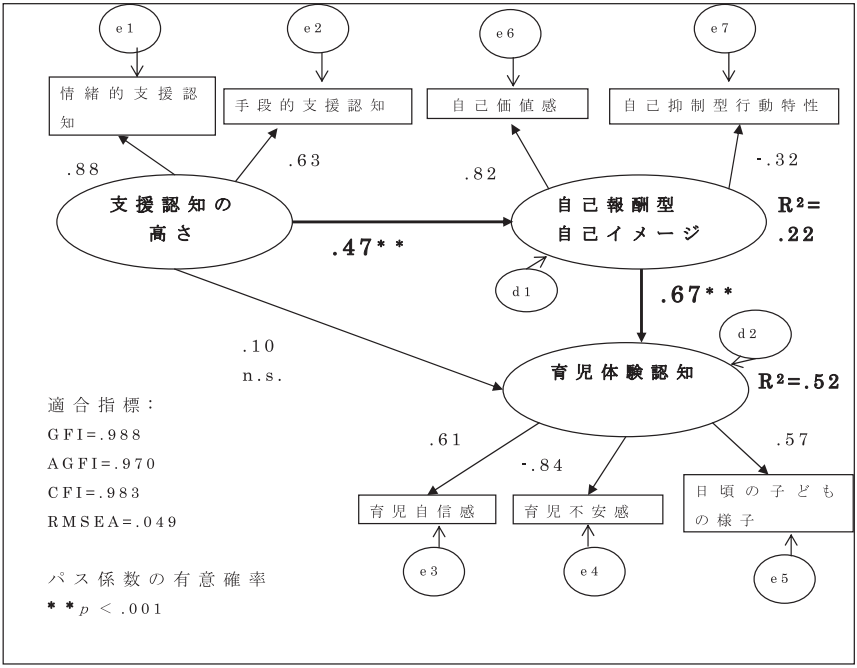

図2　支援認知の高さと自己報酬型自己イメージおよび育児体験認知との因果モデル

Ⅳ．考察

本研究では乳幼児を持つ母親の心理社会的要因の側面を明らかにするために，母親の支援認知，自己イメージと育児体験認知との関連性および影響について検討を行った。

まず，Pearsonの相関分析および重回帰分析を行った上で，潜在変数を決定し仮説モデルを立脚した。育児関連の尺度では，各尺度に強い正の相関がみられた。そこで，母親は育児の体験のなかで自信や不安を感じ，そしてその両感情が子どもの状態をどのように認知するかと関連しているとの指摘[24] から「育児体験認知」という一つの潜在変数とした。

共分散構造分析により育児体験認知に関する心理社会的要因の因果モデルを検討した結果から，周囲からの「支援認知の高さ」があると，「自己報酬型自己イメージ」を促進し，「育児体験認知」に影響する傾向が示唆された。また，「支援認知の高さ」から

「育児体験認知」への直接的な影響は認められなかった。

周囲からの支援認知が高いことは，周囲との関係が良好であり，自分自身が愛され受容されていると感じるために母親自身が自分に抱く自己イメージも良好になると考えられた。自己報酬型自己イメージがあると，愉しさ，感動，達成感，成長，感謝，共感などのポジティブ感情を喚起しやすい[25]。育児へのポジティブな感情がある限り，育児不安による混乱は生じにくい[26]，と指摘されており，本結果もこのような結果を支持していると推察できる。また，育児不安と自己イメージが関連しているといわれており[12]～[14]，自己報酬型自己イメージをもつ母親は，子どもの態度も肯定的に受けとめ，育児を愉しみ，育児に対する見通しを持ちやすいため育児不安感が弱まることが推察された。

本結果のモデルからは，支援認知の高さと育児体験認知との直接的な関連性は見出されなかった。このことは，母親が自分に抱いている他者報酬追求型の自己イメージと関連があるのではないかと考えた。原口らは[27]，母親が社会規範をもとに描いた母親としての理想イメージから現実の自分が下回れば下回るほど育児不安が喚起されやすいなどの指摘や完全主義と育児不安との関連との指摘もある[13]。つまり，支援を認知が低ければ，自分に自信が得られず他者報酬型の自己イメージが形成されやすくなると考えられる。他者の評価を気にして他者から報酬が得られるように生きるような他者報酬追求型の人生は，常に不安と恐怖という感情を伴う[28][29]。他者報酬追求型の生き方をしている母親にとっては周囲から非難されないよう，完全な母親として認められようと行動しようとするからこそ，重圧や不安が高まると考えられる。そのためには，母親自身が自分で自分を尊重し自信が得られるような支援が有効ではないかと推察できる。

以上のことから，既存の育児支援は育児環境を提供するという形式が多い。しかしながら，環境を提供するだけではなくそれをどのように認知するかが重要であり，その結果，自己イメージが良好になり，育児不安の解消・軽減になることが本研究より示唆が得られた。そのためにも，環境を提供するだけの支援だけではなく，母親の自己イメージを改善するための支援も必要であると考えられた。

しかしながら，今回の結果では,潜在変数「育児体験認知」の決定係数があまり高くないことから「育児体験認知」には，他の要因もあることが考えられるため，量的調査だけでなく質的調査の必要性が今後の課題であろう。

本来は、母親にとって子どもを育てることは人間性を豊かにするものなのである[15]。

周囲からの支援を感じることにより，自己報酬型の自己イメージが促進されれば育児体験を肯定的に認知できることが推察された。

文献

1）渡辺久子：母子臨床と世代間伝達, 金剛出版, 東京, 2000

2）Maselko J, Kubzansky L, Lipsitt L, Buka SL: Mother's Affection at 8 months Predicts Emotional Distress in Adulthood, Journal of Epidemiol Community Health, 65（7）: 621-625, 2011

3）内山絢子：調査報告から見たわが国の児童虐待の実態と今後の課題, 子ども社会研究，3：29-43, 1997

4）牧野カツコ：乳幼児をもつ母親の生活と<「育児不安」>, 家庭教育研究紀要，3：43-56, 1982

5）旧厚生省：健やか親子21検討会，母子保健の2010年までの国民運動計画，健やか親子21検討会報告書, 2000

6）内閣府：少子化社会対策会議報告，2008

7）牧野カツコ：乳幼児をもつ母親の「育児不安」－父親の生活及び意識との関連, 家庭教育研究所紀要，6：11-24, 1985

8）金岡緑，藤田大輔：乳幼児をもつ母親の特性的自己効力感及びソーシャルサポートと育児に関する否定的感情との関連性，厚生の指標，49（6）：22-29, 2000

9）Cochran M, Brassard J : Child Development and Personal Social Networks, Child Development, 50 : 601-616, 1979

10）Hisata M，Miguchi M，Senda S，Niwa I : Childcare Stress and Postpartum Depression － An Examination of the Stress-buffering Effect of Marital Intimacy as Social Support－，Research in Social Psychology，6 : 42-51, 1990

11）Tarkka MT, Paunonen M, Lappipala P : Social Support Provided by Public Health Nurses and the Coping of First-time Mothers with Child Care, Public Health Nurse, 16：114-119, 1999

12）田中和子：育児適応に影響を与える要因の検討, 母性衛生, 47（4）：554-562, 2007

13）藤井加那子，永井利三郎：育児期にある母親の育児満足感に影響する因子，子育て不安の認識の有無による違い, 小児保健研究，67（1）：10-17, 2008

14）Mitchelson J.K, Burns L.R : Carrere Mothers and Perfectionism, Stress at Work and at Home, Personality and Individual Differences, 25：477-485, 1998
15）柏木恵子，若松素子：「親となる」ことによる人格発達，生涯発達的視点から親を研究する試み，発達心理学研究，5 : 72-83，1994
16）清水嘉子，伊勢カンナ：母親の育児幸福感と育児事情の実態，母性衛生，47 : 344-351, 2006
17）山本美奈子，宗像恒次：労働者の職場環境認知と精神健康度に関する分析モデル—予備的研究，メンタルヘルスの社会学，12：58-68, 2006
18）橋本佐由理, 中野智美, 樋口倫子：両親イメージが自己イメージに与える影響に関する調査研究, 日本保健医療行動科学会年報, 19：121-138, 2004
19）Rosenberg M : Society and the Adolescent Self-image, Princeton New Jersey, Princeton University Press, 1965
20）宗像恒次，高臣武史，河野洋二郎：日米青少年の家庭環境と精神健康に関する比較研究，昭和62年度厚生省科学研究報告書, 1982
21）宗像恒次：最新行動科学からみた健康と病気, メヂカルフレンド社, 東京, 1996
22）奥富庸一, 橋本佐由理, 池田佳子：「育児自信感」および「育児不安感」の尺度作成に関する研究, 日本精神保健社会学会年報, 13：38-49, 2007
23）川井尚，庄司順一, 千賀悠子，加藤博仁，中野恵美子，恒次欽也：育児不安に関する基礎的検討，日本総合愛育研究所紀要 30：27-39, 1993
24）川崎佳代子, 小林慎子，北条恵美子：育児感情・育児行動の実態及び関連する要因―４歳未満の子供を育児中の母親の調査から―，母性衛生，41（1）：158-169, 2000
25）宗像恒次：SAT療法，155，金子書房，東京，2006
26）加藤孝士：母親の主観的幸福感とソーシャルサポートの関係－最も関わる人物からのサポート－，小児保健研究，67（1）：57-62，2008
27）原口由紀子，松浦治代，矢倉紀子，佐々木くみ子，笠置綱清：母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連，小児保健研究, 64（2）：265-271，19-28、2005
28）宗像恒次：困窮体験が促す本当のライフキャリア形成 SAT表情再脚本化イメージ法による支援，ヘルスカウンセリング学会年報，15 : 1-12, 2009
29）宗像恒次：総うつ時代の社会学的克服策－他者報酬型労働から自己報酬型労働へ,

ストレス科学, 22（1）：24-30, 2007